

子育て経験をもつ成人女性による一時預かり活動

—支援することによる発達—

加藤道代

乳幼児一時預かり活動が支援者として従事する成人女性に与える意味を検討するため、女性5名(49歳～59歳)に半構造化面接調査を行った。(1)活動動機は、乳幼児の世話や母親理解への自負と、子育てひと段落後の「何かしたい」という思いであったが、母親の自分本位な預け方に直面すると、母親への励ましはより教育的配慮を含むようになった。(2)自分の子育てと異なる第三者的な視点により、余裕ある対応ができることや、(3)現役として必要とされる自分であるという認識、(4)生活の張りを感じる一方、(5)自分の過去の子育てに対する心残りを感じた。(6)預かり体験で得られたスキルや知識は、成長したわが子や嫁の子育てに役立てられていた。成人期中期において自らの子育てをとらえ直し、人生における現在と今後の立ち位置に気づくこととなった支援者としての発達に関して、エリクソンの世代性の概念を背景に議論された。

キーワード：成人発達 世代性 子育て体験 中年期女性 一時預かり

1. 問題と目的

少子化や核家族化の進む中、安心して子どもを育てられる場、子どもの健全育成を見守る場として、地域社会再生の重要性が指摘されている。地域の子育て関連情報の提供、子育てや育児不安等についての相談や助言、子育てサークルやサロン等の交流の場の提供と交流の促進、特別保育事業の実施、緊急時や用事の際の一時預かり支援など、地域子育て支援拠点事業はその柱と言えるだろう。支援対象は、仕事と子育てや介護との両立を迫られる親のみならず、子どもを持つすべての家庭へと拡大され、支援母体も、市町村行政に加えて各種団体や個人レベルの活動も含め、多様な地域資源が活躍している。

こうした支援におけるプログラム運営の背後には、実に多くのボランティアがかかわっている。なかでも、子育てを経験した成人女性の存在は主要な実働資源として欠かせないものがある。ボランティアの募集、養成にあたっては、子育て経験は重宝されるも、必ずしも有資格であることが求められているわけではない。加藤〔加藤、2007：243-270〕によれば、初めて子育てにむかう母親は、養育ケアの開始・習得期に、子育て経験のある身近な女性(実母、姑、姉、従姉、近隣の友人知人など)

から、子育てスキル、知識や知恵の伝授と援助を受けるとともに、自分が育てられた時の事柄や実親の思いを伝えられていた。すなわち若い母親たちは、子育ての先輩にあたる年長女性から、道具的、情緒的、情動的支援に加え、支援者自身が辿ってきた子育てへの思いを含む総合的な支援を受けていると考えられる。

それでは、支援を行う年長女性自身は、その支援行動によってどのような影響を受けているのだろうか。支援者となる女性は、自らの子育てがひと段落した時期にあり、その行為は次世代に向けられた支援や世話と言える。子育てにまつわる支援関係が、成人期における世代間の相互作用であるということを考慮すると、エリクソンが心理社会的発達理論において示した成人期の世代性概念が想起されよう。当初エリクソンは、世代性に関して「次世代を確立させて導くことの関心」と定義していた [Erikson, 1950: 231]。しかしその後、世代性は、子孫を生み出すこと (procreativity)、生産性 (productivity)、創造性 (creativity) を含み、自分自身の同一性の展開にかかわる自己一生殖 (self-generation) からなる概念として定義されるようになる [Erikson & Erikson, 1997: 66-72]。すなわち世代性は、単に親として子どもを育てることにとどまらず、家族、社会、未来の世代への関心や、新たなものを生み出すこと (generation) により自己を開拓していくことに繋がる個性と関係性の発達の統合と考えられた。これらを総合すると、子育てがひと段落した成人女性が社会的場面を通じて行う子育て支援は、他者への世話を通して、自己の新たな一面を拓く生産的な活動性に繋がることが予想できる。その際、自分の子育て体験はどのように活かされ、支援活動によって何が新たに生み出されているのだろうか。

以上の様な問いを踏まえて、本研究では、子育て経験をもつ成人女性が年下の母親やその子ども (乳幼児) にかかわり支援することによってどのような影響を受けているのかに関する詳細をとらえたいと考えた。具体的には、一時預かりのボランティア活動の場を焦点化し、子育て経験をもって活動に携わる成人女性を対象とした半構造化面接調査を行い、一時預かり活動への動機や参加の経緯、ならびに、活動によってもたらされるものについて検討していく。

2. 方法

2.1. 協力者と面接構造

A 市で一時預かりを行う子育て支援2団体に調査を依頼し、調査者 (筆者) がスタッフの1人として参与する許可を得た。通常活動に参加する中で、調査の趣旨を説明し同意を得た5名を対象に、「自分の体験してきた子育て」「一時預かり活動を始めた動機」「一時預かり活動を行って感じたこと、気づいたこと」に関する問いを中心とした半構造化面接を行った。面接調査の場所と日時は、協力者の意向によった。研究目的、面接によって得られたデータの用途、協力者の権利、研究者の倫理的責任を明確にした同意書を交わした後、面接が開始された。基本的に協力者の自由な語りを妨げないようにしながらも、用意した各質問については、最終的に面接のどこかでは触れてもらえるように配慮すること、出来る限り具体的なエピソードも含めて語ってもらうことに留意した。1回につき1時間半から2時間の面接を1、2回行い、語りが飽和した時点で終了とした。面接内容は、協力

者の許可を得て録音し、文字起こしして以下の分析に使用した。実施は2007年9月～11月である。

2.2. 分析

得られた語りの全文について KJ 法〔川喜田、1967〕を援用して内容分析を行った。それぞれの語りを繰り返し熟読し、リサーチクエスション（「自分の体験してきた子育て」「一時預かり活動への動機」「一時預かり活動による影響」）ごとにエピソード内容をまとめた。内容を濃縮したキーワードを抽出してラベルをふり類似したものをまとめてカテゴリー化した。相違点については個人のストーリーに立ち戻り検討した。ただし、研究目的に関係が弱いと思われる個人的事情に関する語りは今回の分析にはとりあげなかった。次に抽出されたカテゴリー間の関連を図解した。

3. 結果

3.1. 協力者の属性

互いに5名の協力者の年齢は49歳から59歳であった。全員に子育て経験があり、Aを除く4名には孫がいた。Aは他の協力者に比べて託児・一時預かり歴が断続的ではあるが長い。DとEは、託児・一時預かり以外にもボランティア体験があった（表1）。なおBを除く4名は、出産後のフルタイムの就職経験はない。

表1 面接協力者概要

協力者	年齢	子ども年齢	託児歴	備考
A	49歳	14歳・12歳	10年(断続的)	夫の両親と同居
B	49歳	25歳・22歳・21歳	1年	長男が小学校3年時離婚。フルタイム就業経験あり
C	55歳	30歳・25歳	1年	転勤族で現在夫は単身赴任
D	58歳	35歳・33歳・30歳	半年	病院案内、音読ボランティア体験あり
E	59歳	35歳・33歳	2年	民生委員、里親、養護施設の子どもの対象とした宿泊ボランティア体験あり

3.2. 結果

用意された基本的な問いは、「自分の体験してきた子育て」「一時預かり活動を始めた動機」「一時預かり活動を行って感じたこと、気づいたこと」である。自身の子育て体験やサポート状況については、個人的事情には相違点があるが、①子育ては無我夢中であったこと、②仕事人間の夫 ③自分ひとりで子育てを背っており、自分の用事で他者に子どもを預けることはなかったこと、④子どもを遊ばせるための仲間や、⑤子どもの存在を気にかけてくれる近隣が存在したことが語られた。一時預かり活動への関心や動機については、①子どもの成長と寂しさ、②自分にできることの模索、③子ども対応や母親理解の自負、④余裕(時間・金銭・健康)、⑤社会とのかかわり、⑥地域社会への貢献・お返し・使命感の6カテゴリーとしてまとめられた。一時預かりによる影響は、①後輩の母親への思い、②子どもの可愛さ、愛おしさ、保護したい気持ちの確認、③必要とされる自分、現役としての自分、④生活の張り、⑤自分の子育てへの心残り、⑥家族への役立ちの6カテゴリーが、概ね共

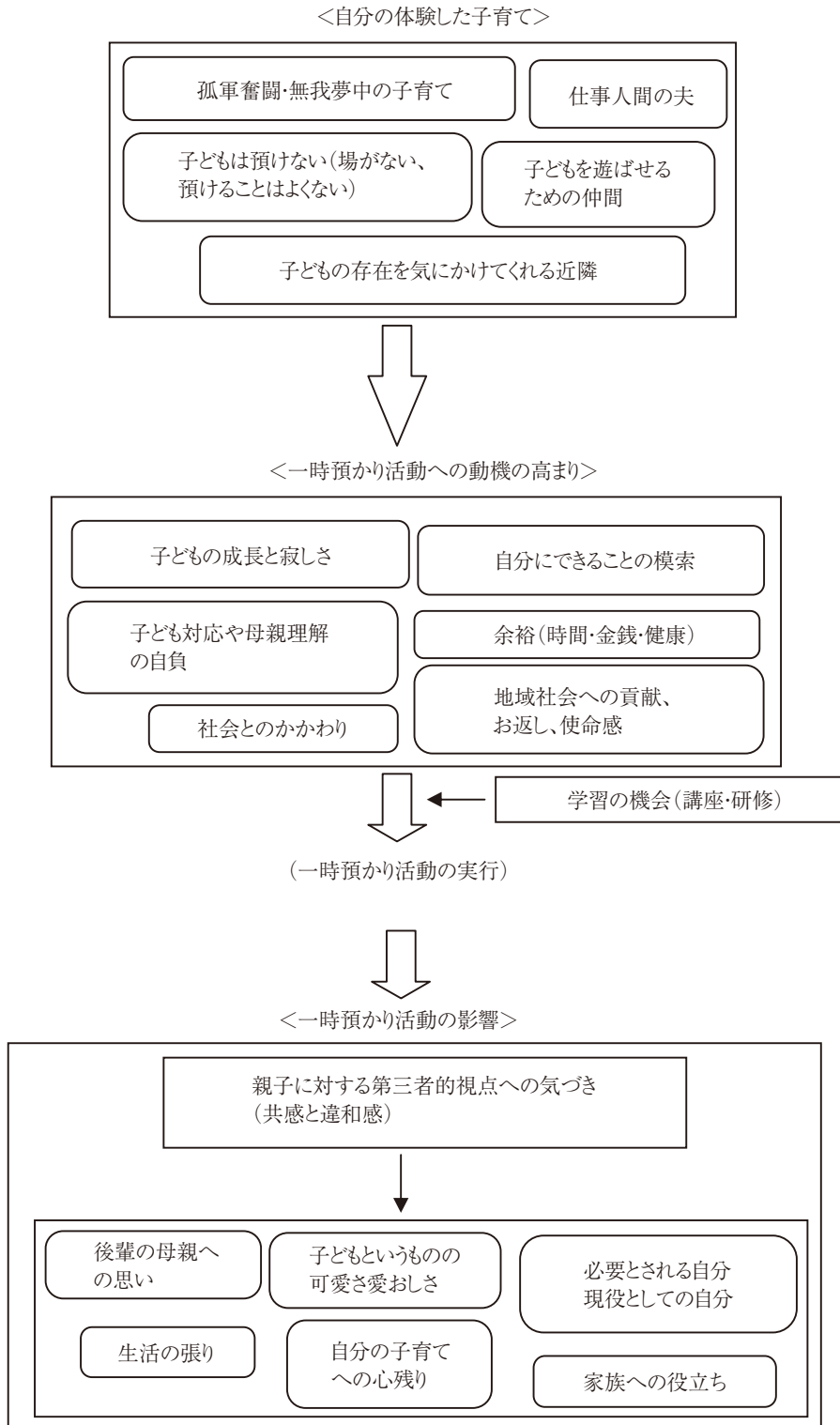


図1 成人女性における子育て経験と一時預かり活動の関係

通して語られていることがわかった。また、一時預かり体験によるこれらの影響はいずれも、預かる親子への「第三者的視点」が影響していること、一時預かり活動への動機の高まりと実行の間には、一時預かりボランティア講座や研修など、「学習の機会」が経験されていることが明らかとなった。以下、面接を通じて得られた全カテゴリーの関係をまとめ、図 I に示し、エピソードをあげながら記述していく。

(1)自分の体験してきた子育て

①孤軍奮闘・無我夢中の子育て ②仕事人間の夫 ③子どもは預けない

Bは夫の仕事が不安定なため、3人の子どもたちを託児所に預けながら夜間の仕事で生計を立てていた。子どもたちが幼少時に離婚してからは、ひとりで3人の子どもを育ててきた。他4名の夫は、いずれも「仕事人間(A、C、D、E)」で子育てへの手助けの面ではあてにならず、子育てはひとりで抱えてやってきたという感が強い。Cは転勤族で引越しも多く、知っている人のいない地での子育ては孤立感も強かった。日中、子どもと自分だけの生活は気が抜けず、大きな声をあげたりたたくこともあった(A、C、D)。5人はいずれも夢中で子育てを行っていたが、当時はそれが当たり前と思っており、「大変だ」という自覚はなかったという。

C 昔って、なかったんですよ、こういう気軽に預けられるところとか。だから一人で子どもと向き合ってすごくストレスになったのを覚えてます。あの頃、育児ノイローゼって流行った頃なんですよ。何かそれはすごくわかるって思いましたもん。一步間違えれば自分も、っていうことありました。それでも出て行くところないし、自分で子どもをみなきゃいけないんだっていう。

D すごい暴言を吐いてたんです。3番目の子には、あんたは橋の下で、わんわん泣いてたから拾ってきてあげたんだって言ってしまって。しばらく言ってましたね、あの子。中学くらいまで覚えてたかな。ああ、これは今で言う虐待だなんて。

夜間の仕事を行うBは、精神的にも経済的にも追い詰められ、周囲には心が開けず、近所づきあいももてなかった。それでも、子どもをベビーカーに乗せて歩いていると、先輩の母親、近所の年配女性、お店の人などが、面識がなくても足を止めて覗き込み話しかけてくれた。こうしたことからBは、「子どもが一人いるということは声をかけてもらえるということなのだ」と気づいたという。

義父母と同居していたAは、あまり手がかからない子どもたちだったこともあり、美容院に行く3時間くらいであれば義母に預けることができた。しかし、やはり自分の用事で預けることには遠慮があった。同居世帯のため、友人を家に招き入れることにも気兼ねがあり、逆に友人宅へ行く一方なのも先方に気まずい。しかし、家の中で子どもとだけ向き合っているのも閉塞的で辛い。そこで子どもと一緒に居られる場所を探して、頻繁に近隣への外出を繰り返した。人づきあいが得意ではないため、知り合う友人とは挨拶程度の間柄であったが、それでも家から出たくて、天気さえよければベビーカーを押しながら遠くまでどんどん歩いた。「それは子どものためというより、自分のためだった」と語る。

子育てをめぐる状況は各々の事情が反映されていたが、全員が一様に語ったのは、自分の用事で

他者に子どもを預けることはなかったということである。預けざるを得ないのは、第二子、第三子出産の時や、どうしても下の子を連れていけない上の子の用事の時であり、その際には実家の手を借りたとのことであった。

C あの、なんて言うんでしょう、自分の用事で預かったり預けたりってことはなかったような気がします。遊びに行っていて、「お母さん、先に帰るから」みたいな、それで子どもは「遊んでるっ」っていうことはあったけども……。何かいけないことだったんですよ、昔は。自分の用事のために預けるっていうのは。仕事をするこも、子どもを預けて仕事をするこもっていうこも自体、「えっ？」て言う人も結構多かっ時代でした。

④子どもを遊ばせるための仲間 ⑤子どもの存在を気にかけてくれる近隣

C、D、Eは、子育て最初期には知り合いもなく孤立していたが、次第に子どもを遊ばせる仲間や近所の年配の人たちとのつながりが生まれていった。自分の子どもは自分でみなければならぬ。しかし、叱られて泣いている子どもに近隣の人たちがお菓子をあげて声をかけるなど、子どもの存在を気にかけてくれる他者は存在していた。

E たまたまアパートの同じ階の同年代と集まって、5人グループで5家族分の子どもをみたり。あと、2家族くらいでみて、3家族は自分の時間を持つとかやっていたんですよ。集えた場所だったんですよ。趣味も一緒にやれたりとか、自分たちが本の読み聞かせをやって。……だってあのころ、特別に支援ってありませんでしたよ。当たり前にお昼一緒に作って、それで食べさせたりとかやっていた。

(2)一時預かり活動への動機の高まり

①子どもの成長と寂しさ

子どもが小さかった頃の思い出は、上記のように孤軍奮闘で無我夢中のものであったが、ようやく成長した後は、寂しさや物足りなさを感じるようになっていく。

B 子どもが生まれてから、あれだけずっと自分の時間が欲しいって風になってきて、やっと自分の時間が。日曜日も、あと仕事が終わって帰ってきてからも、自分の時間ばかりになった瞬間から、ものすごく寂しいわけですよ。テレビを見ている、本を読んでいる、全然面白くないんですよ。……子どもを育てることが私の生きがいのような感じで、朝から晩まで私がやらなくちゃあって感じで。でもそれは自分の中の自己満足と達成感でもあったんです。それが、あるとき、親の手もいらなくなったっていう年代に子どもたちが入ったときに……物足りないっていうか、寂しいっていうか、このまま年取っていくのかなとか、ものすごく何でしょう、考えたこともないような老後のことを、その頃から意識するようになりましたね。

②自分にできることの模索

一時預かりを始めようと思った時は、5名とも「何かしたい」と自分にできることを模索する時期であった。子育てはひと段落した後、「やっと自分の時間が出来たら淋しかった。自分の身を今ど

ここに置こうかと模索(B、D)、「何かちょっとでもできることがあれば(C)」「何かできることはないか(D、E)」と「何か」を探す中で、一時預かりボランティア募集に目を止めていた。

③子ども対応や母親理解の自負

一時預かりの募集には子育て体験が歓迎されていたが、自分自身としても、子育てをしてきたのだから子どもの世話くらいならできるだろうという自負があった。それは、子どもがまだ幼い時期に活動を開始したAを含め、5名いずれにおいても同様であった。

A 自分に出来ることがないかなってときに、特に手に職があるわけじゃない、免許があるわけじゃない。何が出来るか、子どもをみるることかなっていうところで。たいした経験じゃないですけど、まあ子どもは2人もいるし、よそのお子さんもみれるかなって。

こうした子どもへの対応の自負に加えて、厳しい状況での子育てにはそれを経験したものでなければわからないという、困った状態におかれた母親への理解に関する自負を挙げるものもいた。例えばCは、「転勤族で子育てに苦労した経験が助けになれば」と語り、Bは、「以前の自分と同様、夜間に子どもを預けなければならない人のために活動したい」という、使命感にも似た思いを語った。

B ほんとに大変な人のために、ちゃんと安全で安心っていう、それってやっぱり経験してきた人が一番良いのかなっていう自負なんです。やっぱりこういった思いをまったくしないで、日のあたるところでまっすぐ子育てしてきたら、多分そのお母さんたちの辛さや苦しさや悲しさや、あのみじめさって思いはわからないと思うんですね。私は、乗り越えてきたって言うのは変ですけど、そういった経験はしてきたので、なんかもっと身近なところで話も聞けるし、応援も出来るし、って思った。・・・とにかく夜間預けるところをひとつでもいいから設けておきたいという気持ち。

④余裕(時間・金銭・健康)

「時間があって手が空いている(C)」「ちょっと時間もできたし夫も健康だし(D)」「子どもが手を離れて今なら経済的にもちょっと余裕がある(E)」など、子育てがひと段落したことで生まれた様々な余裕も動機としてあげられた。

⑤社会とのかかわり

Aは外出したいという強い欲求が第一の動機であったが、一時預かりボランティアは子ども連れでも出来たことや、義父母に対して正当な外出の理由になることも重要であった。

A 子どもとだけ向き合っているのが厳しかったので、上の子が幼稚園に行き始めたときに、ああ、これで1人いなくなる、これで活動範囲が広がるかなと思って、下の子をおぶって託児ボランティア養成講座を受けた。何とか外に出る手立てないかな、子どもと一緒に出来ることないかなと。女の人がフルで仕事できる風潮ではなかったけど、託児は仕事ではなかったから。子どもと一緒になら許されるかなという風に思ってた。・・・市民センターで公がやるので、義父母に対して外に出る理由にもなったんですね、ただ単に遊び

に行くんじゃないっていう。

⑥地域社会への貢献・お返し、使命感

「何か地域に貢献できることはないか(D)」という考えもみられた(C、D、E)。Eは、次男が出産時のトラブルにもかかわらず無事に成人したことに対する感謝の気持ちを何かのかたちでお返ししたいと感じ、その思いを地域貢献に託していた。Cは、現在の居住地が地元ではないものの、これからも長く住むことになると考え、地域に密着した活動をしたと考えていた。またBのように、虐待のニュースを聞く中で、何とかしなければならないという強い使命感に突き動かされた者もいる。

(3)学習の機会(一時預かりボランティア講座、研修)

活動への興味、関心や、子育て体験による自信はあっても、いざ他人の子どもを預かるとなると、自分の子育てから年月がたっていること、資格を持っていないなど、躊躇がないではなかった。他人の子どもを預かるとの責任の重さや、それにもかかわらず報酬がない(あるいはほとんどない)ことについて周囲から指摘されることもあった。

そうした不安を払拭し、「資格がなくても自分にもできるかもしれない(C)」と活動へ後押ししてくれたのは、一時預かりボランティア養成講座や研修の存在であった。講座や研修という学習の機会は、「せっかくそういった機会があるなら学びたい(B)」という潜在的な向学心や意欲をも刺激し、さらに活動意欲を高めることにもなっていた。

A 養成講座のあとも、年に何回か研修でいろんなこと教えてくれるんですよ、遊びだったりとか、救急の時のこととか。そういうことは、知識としてほんとに役に立ったなって。対処できるっていうか、心構えができたな。

D 何かそういうものに携わりたいと思っても、何にも知識が無くてはいけないと思って、ちょうど良い機会だし、この機会に受けておこうかなって思って。・・・パートも時間をつぶすための仕事みたいでなんだか物足りなくなってる。仕事をして、お店番とかだったら何にも残らないんですよ、だから、何か自分で勉強をして、やりたいっていうのがあった。

(4)一時預かり活動(親子に対する第三者的視点)とそれによってもたらされるもの

自分の子育て体験をもとに活動を始めてみて気づいたのは、一時預かりと自分の子育ての違いであった。「よその子だと何でも冷静に受け止めてあげられる(A)」、「第三者として預かると純粋に可愛いって思える(B)」、「子育ての楽しみとはまた違う楽しみ(D)」など、親子関係と違って、距離を置いて対応に余裕をもつことができた。預かる子どもは手放しで可愛いと感じられ、「お世話してあげるのが自分の中の喜び(B)」と感じられた。

こうした第三者的な視点は、預かった子どもに対してだけではなく預ける母親にも注がれる。5名はいずれも、基本的には母親に多大な共感をもって傍らから見ていた。

D お母さん、「初めて離すんです」って言って、後ろ髪引かれながら預けていかれたんです。帰ってきて、(子どもが)自分のところに一番に来ると思ったら、お母さんを見てもね、全然反応しなかったって涙ぐんでらっしゃった。この場所が良かった、って思っていただけなのは嬉しくても、でもお母さんの立場になったらやっぱり、ね、一番に「ママッ」って駆けてってあげたらいいのに、と思いつつ複雑でしたね。

しかし一方で、自分の辿ってきた時代やその中で行ってきた子育てに照らして、違和感を感じざるを得ないこともあった。それは主として、子どもに対する母親の世話が希薄と感ぜられる場面や、子どもに負担がかかっていると思われる場面について語られた。例えばDは母親がランチを楽しむために子どもを預けると、「ああ、子どもは連れていかないんだ」と違和感を感じ、「昔はやっぱり自分の子どもは自分で育てなくちゃというのがあった」と振り返る。Aは、預けた母親が講座には出席せずに違うところに行っていた「自分本位な利用」の例をあげて、「前はほんとに子どもを病院に連れて行くので下の子預けたいとかそういう理由ばかりだった」と驚く。また、「最後まで泣きっぱなしの子どもには、まだ預けないでもうちょっとみてあげればいいのに」とも思う。そして、そうした違和感は、5名いずれにおいても、本当に必要な支援とは何か、という問いへと繋がっていた。

E はじめての預かりで、2、3歳の子どもさんであっても、「お母さん行ってくるからね」もなく、こっちを向いて子どもの目も見ることもなく。ってことは、本当にお家で向き合った生活してるんだろうか、と。…今のお母さんって支援がいっぱいありますよね、それなのにどうして子どもに対する思いって…。逆に自分でしなかった、しないからかな。本当にいいんだろうか、親の自覚、責任っていうところでね、それってどうなんだろう。…本当に必要とされている部分に必要な支援がいつてるのかな、余計なお世話をしている部分もあるのかなって。

こうして5名はいずれも、一時預かりに携わることによって、親、子ども、及び子育て自体を第三者的な視点をもってとらえるようになり、活動を始める以前にはなかった新たな気づきを得ていた。そうした気づきは「後輩の母親(預ける母親)への思い」、「子どもの可愛さ、愛おしさ、保護したい気持ちの確認」、「必要とされる自分、現役としての自分」、「生活の張り」、「自分の子育てへの心残り」、「家族への役立ち」としてまとめられた。以下、各カテゴリーごとに例をあげて示していく。

①後輩の母親への思い

Aは「母親に余裕が出来れば子どもに優しく接してあげられる。預けられても大丈夫な子なら積極的に一時預かりを利用して自分の時間を作ればいい。最後まで泣きっぱなしのような子どもは、べったりいられる時間は短いのでその間は預けるのを我慢してもいいんじゃないかと思う」と述べ、Bは「親が頑張れるところはやってもらい、もうどうしようもないところを支えていきたい。このくらいは頑張れるはずだよ、自分がやってきてるから、辛かったけれどもやれるよという思い」を語る。Cは「あの頃はこういう場はなかった。大変だけれど、結局いつか過ぎていくことだから、もうすぐよ、もうすぐよ」と励まし、Dは「いろんな事件にならないうちにこういうところに預けていただければ救えるんじゃないかと思う」と、単なる日常育児の支援を超えた自分の役割を認識し

ていた。

②子どもの可愛さ、愛おしさ、保護したい気もちの確認

5名はいずれも、一時預かりによって「子どもはやっぱり可愛い」と実感した。「子どもがすがってくる姿や無邪気に頼ってくる姿(A、D)」に、「自分の子どもが大きくなっていくことで失われていく小さい子どもの感触(A)」を感じた。また、泣いて母親を求める姿には、「こんなにお母さんが好きなんだ(A)」、「子どもはお母さんの言葉を信じて待ってるんだ(B)」と再認識し、「保護してあげなきゃという愛おしさ(C)」を感じている。

③必要とされる自分、現役としての自分

一時預かり体験は、預かった子どもから求められ世話をするという意味でも、預けた母親や社会のために役立っているという意味でも、自己の存在意義の確認に繋がっていた。特に、自分の年齢でもまだ現役としてやれるという気持ちや、今だからこそ出来ることがあるという充実感として語られていた。

B 自分の中に、そう、まだ必要とされてる自分がそこにあって。さあ何かやろう、っていう、何でしょう、勇気をもらえる、必要とされているってことで。

E 単純に役に立つだけではない、何か。自分の為にやっている何か。ほんと、自分の為ですよ。こうやって現役でいられることの嬉しさ・・・ずっと現役で、あのいくつになっても、子育てっていう形でね、子どもの笑いか、その心に触れて、やっていけたら幸せかな・・・この年齢になったからやれる子育てって、あるのかなって。

④生活の張り

一時預かりの活動は、「いろいろな人と出会える機会になり、自分の世界が広がった(A、C)」、「手をかけ世話することが自分の中の喜びに変わっていくのに気づいた(B)」という気づきや、「子どもたちに関わることを夫婦や家族のライフワークとしたい(E)」というこれからの人生への思いなどを含めて、日常生活への張りをもたらししていた。

⑤自分の子育てへの心残り

自分の子育てを振り返る中で、5名いずれにも、「～してあげればよかった」「～しなければよかった」という子育てへの心残りが呼び起こされていた。ただし「当時は夢中でわからなかった(B)」、あるいは「その時その時は自分なりに一生懸命だった(A)」のであり、それらの思いは「今だからわかること」と述べている。

C 託児って、子どもと遊んであげればいいわけじゃないですか。でも自分の子育てって、遊んであげられなかった、逆に。ただただ、こういう風に遊んでやればよかったのかなって思います、後悔じゃないですけど・・・ただ今になってみないとわかんないのかなって思いますけどね。何で、何で遊んでやれなかった

んだらうって。ねえ、なんか、「終わってから遊ぶから」って、泣こうが何しようがほんとにおんぶしてまでも家事をやった。そんなことすることなかったのって。

D あの時どうしてあんなに怒ったんだらう、とかね、うん、お尻をたたいたりね、もう外に出てなさいって。今考えるとどうしてやったんだらうなんて思うんだけど。その罪滅ぼしかなあ、今。

E あの時もっと自分がこのぐらい子どもとの距離を置いてみたりね、行動を見れたり、子どものその行動は何の為にやっているのかってわかってたらね。

⑥家族への役立ち

一時預かりでわかったこと、気づいたことは、過去の子育てに向けては少々の心残りを呼ぶ一方で、現在の家族にはポジティブに反映されていた。Aは他の4名と違って自分の子どもが年少の頃から活動を始めていたこともあり、活動で得られた遊びや救急対応に関する知識を直接的に役立っていた。また、つい頭ごなしにものを言いたくなる時、「ちょっと待って。これがよその子どもだったらもっと普通に言える」と冷静に考えられることもあった。C、DやEのように子どもが結婚し、孫が生まれている場合は、祖母としての娘や嫁への助言、手助けに反映されていた。Dは、子育てというものが、自分と子ども、自分と孫、子どもと孫、そして自分と実親を結び営みであることに触れ、「終わらない子育て」に改めて共感を寄せた。

D 子育てってというのは、手がかからなくなってもいつまでも続くのかなって。子どもが子どもを生んだとしても関わっていかなきゃなんないし。子どもがちゃんと子育て出来るんだらうか、っていう心配も終わらないのかな。まあ私のことも、今、親は心配してると思うんですけど。・・・だから、きっと私の子どもも、そういう思いしてこれからやっていかなきゃなんないだらうし、大変だなって。

4. 考察

本論は、子育て経験をもち一時預かりのボランティア活動を行う成人女性が、活動に託するものや、活動によってもたらされるものについて検討してきた。子育てボランティア活動は、子育て経験をもつ女性だけではなく、男性や未婚の女性、既婚でお子さんのいない女性によっても行われているが、本研究は、子育て経験と活動の関係を検討することを目的としていたために、自分の子育てをひと段落した成人女性に焦点化した。本研究の対象者数は十分ではないため、結果の扱いには慎重さが求められるが、自身の子育て経験が多様であるにもかかわらず、下の世代へ向かう気持ちや態度には多くの共通性が見られたことは興味深い。

面接協力者となった女性たちは、Havighurst〔Havighurst 1953:83-91〕や Levinson〔Levinson 1996:13-37〕により成人中期や中年期と呼ばれる年代である。昭和23年～33年生まれであり、子育てを開始した25年～35年前は男女雇用機会均等法施行前であった。語りからは、夫は会社人間で仕事中心の生活の一方、自分が母親として子どもを育てるのは当然の時代であり、母親が働くことや子どもを預けることは「何かいけないこと」という時代であったことがわかる。いずれも当時は子育てという日常を夢中でこなすばかりであったと認識しており、世の中が指摘し始めた育児ノイ

ローゼに共感していたと語る者もいた。従って「子育て支援なき時代」の女性が、現在、子育て支援社会に生きる後輩の母親を支えようとしていることになる。本結果は支える側と支えられる側のこうした世代状況を背景としていることを念頭におかなければならない。

女性たちが活動をはじめの動機のひとつとして、子どもの自立や夫の健康など、家族の状況によって生まれる自分の時間的、経済的余裕が語られた。その他の動機、子育て経験や当時のサポート状況の詳細は、個々の事情が反映され必ずしも一致はしないが、「何かをしたい」という気持ちの高まりと、子どもへの対応の自負という点で共通している。そこに力を与えたのは、研修等の学習の機会であった。それは一時預かり活動への自信を与えただけではなく、潜在的な学習意欲を満たす働きも果たしていた。白石ら〔白石ら 2002:580-585〕の調査によれば、5、60代の女性303名中63%が若い母親を支援する意思があったにもかかわらず、「3歳までの子どもを預かる」と回答したのは全体の20%弱であり、その理由として「自信がない」と回答したものが多かったという。北村(2008)もまた、シニア世代男女に対する調査により、8割が子育て支援に参加してもよいと回答した一方で、「問題が生じた場合の責任」や「どのような支援ができるかがわからない」などの不安が高いことを示した。これらの指摘に対して、本結果からは、学習の機会が与えられることにより、潜在的な支援への意思が実際の活動に結びつく可能性が示唆されている。

一時預かり活動による影響については、5名とも概ね共通していた。子育ての大変さを十分に理解しながらも、さして支援の無い時代に自分で子どもを育ててきたという自負は、後輩の母親の子育てへの共感を高めていた。しかし実際に活動を行うと、活動前には予想しなかった違和感も抱くことになった。多くの場合それは、母親の預け方が自分本位に思えたり、その預け方による子どもへの負担が感じられる時に起こっていた。子育て中の母親が子どもに余裕をもって接するためには、母親が自分の時間をもつことが必要であることは十分理解しながらも、自分本位な預け方や預けられる子どもの負担の大きさを感じると落ち着かない気持ちになったのである。そして、「母親が自分で頑張れる分は頑張りたい、子どもを中心に考えれば我慢しなければならないところは我慢して欲しい」という激励とともに、出来る限りの支援をしたいと考えるようになっていた。後輩の母親への思いは、一時預かりの実体験を通じて、単なる「何かしたい」「子どもの世話ならできる」という体験前の動機から、より教育的な配慮と励ましを含む共感となり、後輩の母親に伝えたい思いとして語られた。

第二の影響は、子どもというものの可愛さに関する再発見である。そもそも子育て経験による自負は、自分の子どもと他者の子ども、自分自身と後輩の母親を共通であると認識することから生じた自信であった。しかし、実際の預かり活動からわかったことは、むしろ「自分の子育てと一時預かりは違う」という実感であった。自分の子どもには冷静になれず、いらいらして叱ることが多かったにもかかわらず、一時預かりで出会う子どもに対しては、余裕ある対応をしている自分に気づいたのである。そして、子どもを愛おしく思い守りたいと思う気持ちが、自分の中に今も存在することを改めて確認することができた。

第三には、家庭内の個人的な行為であった子育て行動が、一時預かりという支援活動に活かされ

たことによって、「現役としての自分」、「必要とされる自分」という認識が生じたことである。そこでは、支援活動の社会的貢献性という面もさることながら、小さな子どもにすぎりつかれ求められること自体が、自分の子どもが成長してしまった後における大きな充足感として受け止められている。第四には、自分の子どもが幼児期に活動を開始したA、専業主婦を続けてきたC、D、Eともに、一時預かり活動に対して、家事とも趣味とも違う「生活の張り」を感じていた。従来、母親役割達成感が低下する成人女性においては、社会的活動が心理的健康に強く関連することが指摘されている〔西田 2000:433-443;宇都宮 2008:25-33〕。従って「生活の張り」は、一時預かりに限定されたものではなく、それが社会参加活動であることによる効果と考えてもよいかもしれない。

その一方、第五として、何故わが子に対してはそうした余裕ある対応ができなかったのかという、過去の子育てへの心残りも生じていた。これは、自分の子どもへのケアが十分ではなかったという悔いでもあるが、上手くいかないながら一生懸命に夢中で頑張ってきたこれまでの自分を愛おしむかのように語られることもあった。そして第六には、活動で身につけた知識や体験が、今では既に親となったわが子や嫁との関係、その子育てに向けて活かされていたことである。子育てというものは、自分と子どもの親子関係だけではなく、自分と実親の親子関係、子どもと孫という親子関係などが多世代間で関係しあい、終わることのない営みであることに気づく者もあった。「この年齢になったからやれる子育てって、あるのかな(E)」という感想は、自らの子育てのとらえなおしであると同時に、加齢に逆らわない人生における新たな立ち位置の発見を表すものと思われる。

子育てから解放後の女性は、仕事、趣味、教養、地域活動など様々な活動を通して、それまでの人生を振り返り、人生後半の目標を定め、新しい行動を起こすようになることが報告されている〔難波、2000:164-177〕。本結果においても、女性たちは、一時預かり活動において第三者という冷静で距離を置いた視線をもって母子とかわることにより、自分の子育てを振り返り再考しただけでなく、過去や現在、そしてこれからの自己や他者との関係が再認識および再構成されたと考えられよう(図2)。中年期における時間的展望の様相は、年代により特徴はあるものの、過去の受容が精神的健康に影響を与える点においては一致していることが指摘されている〔日潟ら、2008:144-156〕。50代が中心となった本結果においても、必ずしもポジティブばかりとは限らない過去について、改めて振り返りとらえなおしをしながら、現在の充実と未来への志向に繋がっているようであり、総じて、一時預かり活動が自己形成の場として機能していることが示唆された。

岡本(岡本、2007:46-53)は、成人としての成熟に関して、達成や自立などによって象徴される「個としてのアイデンティティ」と、ケアや共生によって特徴づけられる「関係性にもとづくアイデンティティ」を軸とし、その両者のバランスと統合が大きな意味をもっていると述べている。本調査の協力者である女性たちは、仕事をすることや子どもを預けることが「何かいけないこと」と感じられる時代に子育てに専念してきた女性たちであった。従って、岡本の指摘する「家庭生活を中心とする私的領域」において、家族に対するケアに重点を置いて生きてきたと考えられる。そうした女性たちにとって、「何かしたい」から始まった一時預かり活動は、「職業を中心とする公的領域」におけるアイデンティティの達成と全体的な統合に寄与し、新たな自己を開拓する世代性の発達に繋

たのではないかと考えられる。

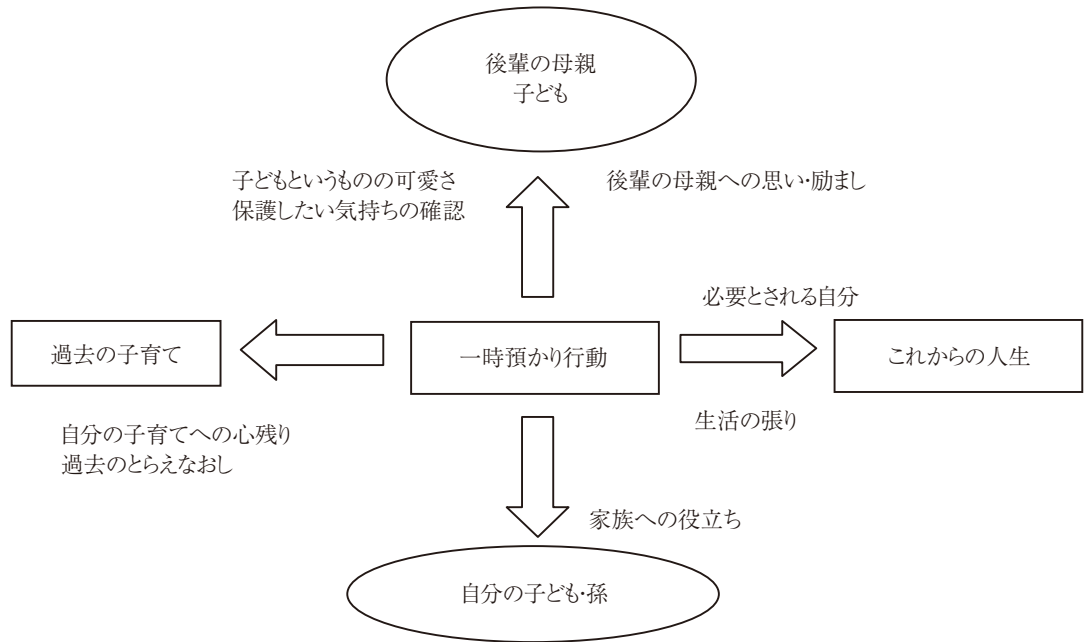


図2 一時預かり行動のもたらすもの

以上、一時預かりボランティア活動は、若い母親の子育てを支えるだけでなく、支援者自身の世代性の発達を促すことについて考察してきた。次に本結果の限界をまとめておきたい。第一に本論が根拠としてきた資料は5名分であり対象者数は十分ではないため、今回得られた視点を手掛かりに、より多くの事例にあたっていくことが必要である。第二に、過去の子育て経験を活かす類似の体験として、孫にかかわる祖父母役割行動との相違点については扱っていない。久保ら〔久保ら、2008:303-311〕は、祖父母になるということがどのようなことなのかをまとめたカテゴリの中に、「命のつながり」や「重荷」という概念を見出してしている。祖父母役割は、孫や孫の親世代と身内の関係であることから、本研究が示した「第三者的視点」とは異なる視点でのかわりを求められるため、一時預かりとは異なる強い情緒的側面をもつことが予想される。従って、子育て体験と世代性に関する論議を行う上では、祖父母役割も含めてさらなる検討が必要となろう。第三に、本結果は、概ね「会社人間の夫と子育てをする妻」として子育て期を送ったコホートの社会経済的文脈を背景としていた。従って、当時に比べると女性の就業率が増加し父親の子育て関与も促された現代の夫婦の将来について、ただちに論を進めることはできない。言い換えれば、現在は被支援者である母親が2、30年後にどのような支援者となるかについて明確ではない反面、現在子育てに関わる父親たちが中年期に至った時、自らの子育てを振り返り後世に活かそうと活動することも考えられないわけではない。白石ら〔白石ら、2002:580-585〕は、子育て支援の意識は昔地域の人々とふれあった

経験と関連があることを示している。地域のふれあいを重視しながら地道に続けられている現在の子育て支援活動が、被支援者が支援者になるための土壌、すなわち男女にかかわらず次世代の子育て支援者を生み出す土壌となっていくことを期待したい。

【引用文献】

- Erikson, E.H. 1950 *Childhood and society*, NY: W. W. Norton & Company, 231. (エリクソン, E. H. 仁科弥生訳 1977 幼児期と社会1 みすず書房.)
- Erikson, E.H. & Erikson, J.M. 1997 *The life cycle completed. Extended version with new chapters on the Ninth Stage of Development*, NY: W. W. Norton & Company, (エリクソン, E. H.・エリクソン, J. M. 村瀬孝雄・近藤邦夫訳 2001 ライフサイクル, その完結 増補版 みすず書房.)
- Havighurst, R.J. 1952 *Development tasks and education*, New York: Longmans. 83-91 (荘司雅子訳 1958 人間の発達課題と教育 牧書店.)
- 日潟淳子 岡本祐子 2008 中年期の時間的展望と精神的健康との関連:40歳代, 50歳代, 60歳代の年代別による検討 発達心理学研究 19(2), 144-156.
- 加藤道代 2007 子育て期の母親における「被援助性」とサポートシステムの変化(2) 東北大学大学院教育学研究科研究年報 55(2), 243-270.
- 川喜田二郎 1967 発想法—創造性開発のために 中央新書 中央公論社.
- 久保恭子 刀根洋子 及川裕子 わが国における祖母の育児支援—祖母性と祖母力— 母性衛生 49(2), 303-311.
- Levinson, D.J. 1996 *The seasons of a woman's life*, New York: Alfred A. Knopf. 13-37
- 難波淳子 2000 中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察—語られたライフヒストリーの分析から— 社会心理学研究 15(3), 164-177.
- 西田裕子 2000 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究 48, 433-443.
- 岡本祐子 2007 アイデンティティ生涯発達論の展開 46-53 ミネルヴァ書房.
- 白石裕子 山地佳代 山之上哲子 松浦賢長 2002 50歳代および60歳代の女性における育児支援者としての潜在的可能性に関する研究 母性衛生 43(4), 580-585.
- 宇都宮博 2008 中高年女性の結婚生活の質と抑うつ—社会的活動, サポートネットワークの関連から— 立命館人間科学研究 17, 25-33 立命館大学人間科学研究科.

本論文は、平成19年度～21年度文部科学省科学研究費(c)一般 課題番号19530974(研究代表者, 加藤道代)による助成を受けた

Temporary child care support by woman with child-rearing experience : A developmental changes of helpers

Michiyo KATO

(Associate Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

Effects of temporary child-care support activities on middle-aged female helpers with child-rearing experience were investigated. Five women (aged between 49 and 59 years) participated in the study. Qualitative analysis of interview data with the participants indicated the following. (1) Motivation for child-care activity was based on self-confidence in child-care skills and sympathy with child-rearing mothers, as well as a wish to do “something else” after completing child-rearing. When encountering self-centered mothers leaving their children alone, participants realized that it is better to educate these mothers than to encourage their selfishness. (2) After strictly parenting their own children, participants could be detached and relaxed and tenderly care for other's children, be not taking a mother's perspective. (3) They realized that they were playing a vital role be care-giving. (4) Participants gained a sense of fulfillment in their lives as a result of care-giving. (5) Most participants expressed some regret about their parenthood such as, “I wish I could have known then what I know now”. (6) Knowledge gained be care activities were very useful when participants had grandchildren. These findings suggest that middle-aged women who participate in temporary child-care activates recall their child-rearing days and ascertain their current and future life-stages. Mid-life development through care-giving is discussed in the context of Erikson's construct of psychosocial generativity.

Key words : development in adulthood, generativity, middle-aged women, child-rearing experience, temporary child care